

スカイプを活用した英語学習によるコミュニケーション活性化の考察 How Skype Utilization in English Learning Enhances Communication among University Students?:

— 大学英語授業調査より

: A Survey of University Students in English Classes.

木村登志子[†] 大野邦夫[‡]

Toshiko KIMURA[†] Kunio OHNO[‡]

[†] 横浜商科大学 [†] Yokohama College of Commerce

[‡] (株)モナビ IT コンサルティング [‡] Monavis IT Consulting Co.

E-mail: [†] t.kimura@shodai.ac.jp, [‡] k-ohno@star.ocn.ne.jp

1. はじめに

グローバル人材育成を目的として英語教育・学習研究が活発に行われている。そのような背景から、効率的な英語教育が検討されているが、その有力な候補として英語言語圏での英語学習を日本で経験することが可能なスカイプを活用する英語学習が注目されている。本稿ではその有効性を把握するために、スカイプによる英語学習を従来からの英語学習と比較検討し、その特徴を把握した上で、実際の教育現場における質問紙調査を紹介し、検討結果を評価する。

2. 先行研究

2.1 英語教育の歴史的経緯、ネットワークの出現

日本人は英語が出来ないとよく言われる。例としては北米を中心とした英語圏への大学・大学院の留学時に必要な英語力測定を目的とした TOEFL iBT などのスコアの平均値をアジア諸国 30 カ国と比べたとき、日本人はきわめて低く、2013 年ではモンゴル、カンボジア、ラオスのみが等しいあるいは低い(廣森,2015)。近隣の中国、韓国と比べても差は歴然としている(廣森,2015)。この理由として、言語語族の言語間の距離の差が理由であるという指摘もあるが日本人の英語力が低いという事実は問題である。

従来の英語教育は、単語と文法の暗記に基づき、リーディングとライティングを行うことが中心であると考えられた。この教育法は、明治維新以来の欧米文化を取り入れて日本を近代化するためには適合する教育であり、工業化を通じた生活水準の向上に貢献した優れた教育であったと思われる。この教育は読み書きを基本とする言語理解であり、文書中心の教育と言えるであろう。一時期、明治時代には初等教育での英語教育が行われた記録もある。この手法は戦前における富

国強兵、殖産興業や戦後の高度経済成長に貢献する人材育成には適合した。その後、一時期英語教育は禁止されたが、戦後、アメリカによる英語教育の復活後は欠陥が顕在化した。日本の経済大国化により、欧米など英語圏で交流する機会が増え、円滑なコミュニケーションのためには、会話力の向上が必要となった。

外国人旅行者、外国人労働力が増加し、英語を使う機会が増えている現代でも「何を言っているのか分からない」「言いたいことが伝わらない」という問題が続出している。小学校から必修化した英語教育だが、読みと書きに特化していた教育の変遷を電子機器、教材の進展と鑑みて考察する。

1925 年、ラジオ放送が開始され、英会話学習やテープレコーダ(1950 年)を活用する LL 教育のような聴覚を活用する学習が導入された。その後、1953 年にテレビ放送が始まり、従来の聴覚のみの英会話に比べると、テレビ番組やビデオカセット(1975 年)などによる視聴覚英語学習が、徐々に視聴覚を活用する学習が行われるようになった。

1995 年の Windows 95 の発売以来、一般にもインターネットが普及し、対話型のビデオ通信が実現すると、英会話学習は一つのエポックを迎えた。従来のテレビ番組やビデオ教材が一方向的な教材であったのに対して、インタラクティブな通信は、双方向的な対話が可能になるためである。そもそも英会話の本質はコミュニケーションでありインタラクティブに行うことにある。そのように考えると従来の英会話教材は、畳の上の水練でしかなかったのである。

対話型のビデオ通信は、いわゆるテレビ電話であり、技術的には 1970 年代に実現可能となっていたが、商業的なニーズや費用対効果の観点でなかなか実現しなかった。それが 21 世紀に入って、通信コストの劇的な低下により個人レベルで使用可能となった。そのインフ

ラのデファクトスタンダードとして、スカイプ(2004年)が挙げられる。その結果、スカイプを用いる英会話学習モデルが一举に普及した。しかしその評価に関しては必ずしも明確になってはいない。

2.2 階層モデル

以上を総括すると、

- (1) 語彙・文法暗記による英文解釈、英作文教育
- (2) ラジオ放送やテープレコーダを活用する聴覚学習
- (3) テレビ番組やビデオ教材による一方向的視聴覚学習
- (4) スカイプを用いる双方向リアルタイム対話型視聴覚学習

と区分される。英語学習の目標をコミュニケーション、会話を通じた自由な意見の交換とすると、上記は図1のような階層的モデルとして描くことが可能であろう。

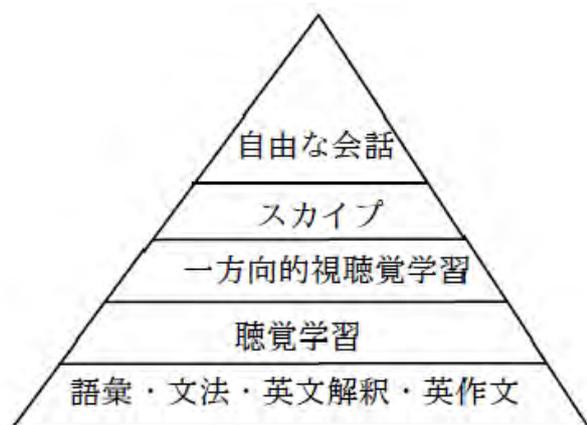


図1 英会話学習の階層モデル

最下層に従来型の英語教育があり、その上に聴覚学習、視聴覚学習、スカイプのレイヤがあり、その上に目標とする自由な会話があるという階層モデルである。以上の階層区分に基づいて、さらに分析を試みる。

2.3 語彙・文法暗記による英文解釈、英作文教育

最近、批判される伝統的な英語教育であるが、この教育法は日本人が英語文化に接した経緯に端を発する。鎖国下にあった江戸時代における西洋文化の取得は、長崎の出島を通じてオランダ経由でもたらされていた。従って幕末における西洋の技術や社会制度に関しては、蘭学が主流になっていたと思われる。それが英語に移行したのは、ペリーの来航に端を発する日米修好通商条約の締結で、種々の外交文書が英語で記述され、外交、貿易の面で一部のエリートに国防の手段として英

語の習得が急がれた。その辺りの状況は福澤諭吉の福翁自伝に書かれている。

もともと蘭学者であった福澤諭吉は、1859年、開国に舵を切った日本の開港先の一つである外国人居留地の横浜に見物に行き、外国人たちのコミュニケーションの共通言語が英語であることに衝撃を受けた。「ちよいともことばが通じない」ばかりか、店の看板も読めない。英語かフランス語なのかさえ分からなかった(川澄,1978)。その後、蘭英会話書を二冊購入し(伊村、若林、1980)、何度も英単語を複写し、文章を写経して(読み書きを暗記して)西洋文化や英語を学んだ。当時、英和辞典の原典となるものは単語集しか存在しなかった。同年、全213の日常会話対訳を掲載した英会話集がジョン万次郎により発行されたのが初の英会話集とされるが福澤は知らなかったようである(伊村、若林、1980)。

福澤は1860年、ジョン万次郎とともに咸臨丸で渡米、米国社会を視察して持ち帰った2冊のウェブスターがその後の英語教育への普及へとつながった(伊村、若林、1980)。アクセント表記、発音記号、不規則変化表などの文法が付記されるようになり、さらに英語の語学書や文法書の翻訳を経て、日本語の文法書が出来上がり、語彙、文法理解、英文解釈、英作文という日本における標準的な英語学習パターンが出来上がったと考えられる。このパターンを考慮すると、図1のモデルは、図2のように拡張される。

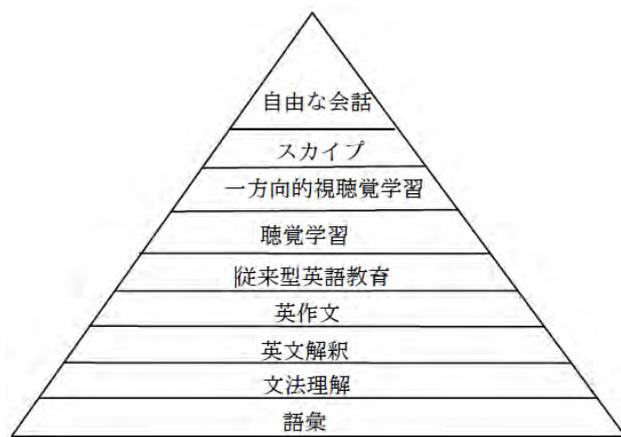


図2 英会話学習の拡張階層モデル

2.4 ラジオ放送やテープレコーダを活用する聴覚学習

前節における英語教育のパターンは、英文の翻訳や英作文のような、文書レベルの英語理解には適合するが、具体的な会話には極めて不適當である。英語の辞書の語彙には発音記号が記されているが、個々の語の発音が理解できるだけで会話が成立するわけではない。その点に関しては、ラジオの英語番組や英会話番組は、

優れた教材であった。戦後の米国駐留軍向けの FEN (Far East Network) は、教材というよりはネイティブのための英語放送であった。この番組の語彙をどの程度聞き取れるか、聞き取れた語彙から内容を推定するような経験は、有効な聴覚訓練であった。テープレコーダが普及してからは、録音テープやカセットテープによる教材が使われるようになった。このような教材は、主に米国の生活を事例にしたものが多かったので、米国人との会話には適合していた。その関連で、米国の価値観を知るためにも良かったのであるが、米国一辺倒の英会話は、幅広く異文化と接するための英語という観点からすると問題も存在した。

2.5 テレビ番組やビデオ教材による(一方向的)視聴覚学習

テレビ番組による英会話学習は、戦後テレビが普及した時点から開始され、早朝の番組だったので、通勤や通学の前にこの番組を見て英語学習をした人はかなり存在したと思われる。ビデオ情報の記録は、音声情報に比べると膨大な記憶容量を必要とするために、音声による聴覚学習に比べると普及は遅れたが、1980年代から使われるようになった模様である。だが、ビデオ教材はカセットテープ程には使用されなかったように思われる。その理由は、会話というのは音声ベースであり、映像は環境情報でしかないためと思われる。例えば記憶しておくべき言い回しなど、音声で記憶することからも明らかであろう。さらにカセットテープであれば、自動車で運転しながら学んだりすることが可能であるが、ビデオ教材だとそうは行かない。そのような背景からビデオ教材は視聴覚による豊富な情報が提供される割には効果的ではなかった。映像による英語教材という点に関しては、有名な映画における名優の台詞など、映画の意味的な文脈を背景にして記憶されるので、文化と一体になった英語として把握される。従ってビデオ教材は、映像が提供する意味的な背景情報を支える言語的な枠組みとして学習されるために適していると思われる。

2.6 スカイクを用いた双方向型視聴覚学習

スカイクを用いる双方向リアルタイム対話は、国内での少人数英会話スクールのビデオ会議版と言える。国内の英会話スクールがかなり高額な授業料を必要とするのに対し、フィリピンのような途上国をベースにするモデルが増えたことは、費用対効果の点ではかなり優位である。さらに英語が公用語であるため生活文化が英語ベースになっているので、国内での英会話よりは純粋な英語生活の環境を対象に学ぶことが可能となる。とは言え、対話する現地教師のスキルが極めて重要である。そのために、単純な評価は困難であるが、次の章のアンケート調査からその一端を紹介したい。

3. スカイク授業に対する評価 (K 大学における質問紙調査)

3.1 背景と概要

スカイクという語句で検索出来る文献は学協会刊行物・大学研究紀要・国立国会図書館の雑誌記事索引データベースなど、学術論文情報を検索の対象とする論文データベース・サービスである CiNii Articles によれば 2017 年 5 月 10 日現在で 74 件、そのうち、スカイクを用いた語学学習についての文献は 8 件である。

2011 年から 2016 年度まで K 大学は英語の授業でスカイクを用いた双方向実時間対話型視聴覚学習を実施した。ここでは 2014 年の 7 月に、経営経済学部およびビジネス創造学部における英語科目の受講学生を対象に行ったアンケート調査結果の一部を紹介する。

3.2 調査方法

対象者は表 1 のとおり、スカイク授業および従来の英会話授業を受講した 85 名である。(学年の選択肢欄に未記入した 1 名を含む。) 学生の授業評価、ニーズの把握を明らかにするため、質問紙を作成し 2012 年 7 月に実施したのから予備データを抜粋した。

表 1 調査対象者属性

	学部		学年				全体
	経営経済	ビジネス	1	2	3	4	
スカイク授業受講者	69	16	69	9	6	0	85

3.3 質問項目

このアンケートの目的は、受講生の英語の授業評価、さらに今後の英語の活用に関する要望など、受講する学生の授業への意識とニーズを把握するためのもので、かなり漠然としたものである。それでもスカイク授業という新しい授業形態における総合的な印象が述べられており、方向性を把握するためには有意義なものであったと考えられる。

3.4 結果

以下にアンケート結果を紹介するが、スカイク授業を受けた調査対象者の個別のデータとそれらのうちから総合したデータが記されている。

Q1: 英語が好きですか

「英語が好きですか」という質問に対する回答を図 3 に示す。



図3 「英語が好きですか」という質問に対する回答

スカイプ授業を受けた調査対象者は、「好き」と「まあまあ好き」が75%、「どちらかといえば嫌い」と「嫌い」が20%であった。

Q2：英語に興味がありますか

「英語に興味がありますか」という質問に対する回答を図4に示す。



図4 「英語に興味がありますか」という質問に対する回答

スカイプ授業を受けた調査対象者は、「興味がある」と「まあまあ、ある」が82%、「あまり興味はない」と「興味はない」が15%であった。

Q3：講義の内容に満足していますか

「講義の内容に満足していますか」という質問に対する回答を図5に示す。



図5 「講義の内容に満足していますか」という質問に対する回答

スカイプ授業を受けた調査対象者は、「はい」と「ど

ちらかといえば、はい」が87%、「どちらかといえば、満足していない」と「いいえ」が13%であった。

Q4：英語科目の内容をどう思いますか

「英語科目の内容をどう思いますか」という質問に対する回答を図6に示す。



図6 「英語科目の内容をどう思いますか」という質問に対する回答

スカイプ授業を受けた調査対象者は、「面白い」と「どちらかといえば、面白い」が89%、「どちらかといえば、つまらない」と「難しいし、わからない」が11%であった。

Q5：選択科目としてどのような英語を今後学びたいですか

「選択科目としてどのような英語を今後学びたいですか」という質問に対する回答を図7に示す。

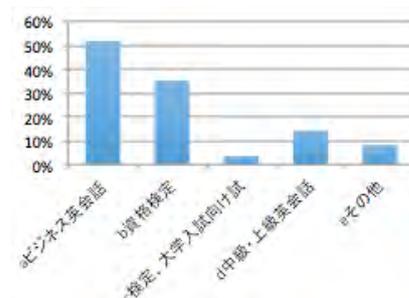


図7 「選択科目としてどのような英語を学びたいですか」という質問に対する回答

スカイプ授業を受けた調査対象者は、「ビジネス英会話」52%、「TOEICなどの資格検定」35%、「検定や大学院入試向け試験」4%、「中級・上級英会話」14%、「その他」8%であった。

Q6：大学で英語を学ぶ目的は何ですか

「大学で英語を学ぶ目的は何ですか」という質問に対する回答を図8に示す。

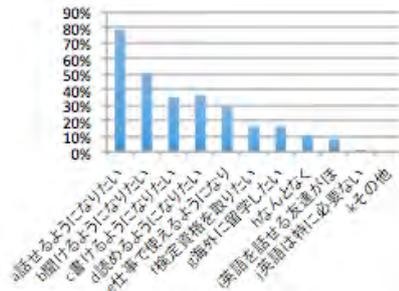


図 8 「大学で英語を学ぶ目的は何ですか」という質問に対する回答

スカイプ授業を受けた調査対象者では「話せるようになりたい」79%、「聞けるようになりたい」51%、「書けるようになりたい」35%、「読めるようになりたい」36%の四技能の他、「仕事で使えるようになりたい」という目標が上位を占めている。

3.5 分析

以上が、アンケートにおける基本的な数値データであるが、Q1の「英語が好きですか」、Q2の「英語に興味がありますか」という潜在的なモチベーションに関する質問に対する回答は約8割が肯定的であった。

Q3の「講義の内容に満足していますか」とQ4の「英語科目の内容をどう思いますか」は、具体的な授業内容に関する質問であるが、これらも約9割が肯定的であった。このようにスカイプ英会話授業は全体に好評である。

Q5の「選択科目としてどのような英語を今後学びたいですか」は、ビジネス英会話への希望が多く、それに次いでTOEICなどの資格検定、その次が中級・上級英会話であった。グローバル化の中、使える英語スキルを身につけたいという要望が伺える。

Q6の「大学で英語を学ぶ目的は何ですか」は、先に述べたとおり、話せるようになりたい、聞けるようになりたい、書けるようになりたい、読めるようになりたい、仕事で使えるようになりたいという目標が上位を占めているが、スカイプ授業による自己啓発効果で、より話せるようになりたいという意識が出現しているとも考えられる。

3.6 現地講師とのコミュニケーション、およびスカイプによる動機付けの自由回答例

以上のアンケートデータに関連して、文章による回答を要求する質問も実施した。例えば、「あなたがいま受けている授業でいいと思う面を教えてください」という質問に対しては、「英語を話さなければ伝わらない状態」「スカイプでの授業なので」「海外の先生から教えてもらえる」「少人数授業だから」「気軽に質問ができる」「フィリピンにいる先生と話せること」といった回答が寄せられている。特にスカイプによる対話的な

やりとりやフィリピン人の先生との対話を挙げた人が半数以上であった。反面、スカイプの接続不良の改善が求められていることが自由回答例に多く挙げられており、今後の設備面での充足が求められる。

4. 考察

図1の、「語彙・文法暗記による英文理解、英作文教育」「ラジオ放送やテープレコーダを活用する聴覚学習」「テレビ番組やビデオ教材による一方的視覚学習」「スカイプを用いる双方向実時間対話型視覚学習」が基本的な経緯であるが、図2のように「語彙・文法暗記による英文理解、英作文教育」がさらに「語彙」「文法」「英文解釈」「英作文」「標準的英語教育」に分けられたモデルに基づいて分析した。

日本の英語教育は教養としての英語から実用として英会話を主体とする動きがある。スカイプという新たな教育ツールの出現は実用英会話が必要とされる今日の日本の英語教育ではますます必要となるであろう。接続面の不安定さが指摘されるが、スカイプ授業のコンテンツのあり方について更なる可能性を探索したい。

文 献

- [1] 白井美由紀, Skype を用いた言語学習の可能性, 東京女子大学言語文化研究 17, 16-38, 2008.
- [2] 鳥飼玖美子, 本物の英語力, 講談社, 2016.
- [3] 廣森友人, 英語学習のメカニズム, 大修館書店, pp.14-16, 2015.
- [4] 川澄哲夫, 資料日本英学史 1-上 英学ことはじめ, 大修館書店, 1988.
- [5] 川澄哲夫, 資料日本英学史 2-英語教育論争史, 大修館書店, pp.5-7, 1978.
- [6] 伊村元道, 若林俊輔, 英語教育の歩み, 中教出版, pp.33,34-38, 1980.